

第5章 地域の将来像及び基本方針

【第3回委員会での指摘事項】

- ・五つの方針には脊振とか固有名詞が全く出ていない。「他県の水源地域の活性化のための方針と何が違うのか」「脊振らしきものは一体どこにあるのか」という意見を言われることがあるが、そのような観点では大丈夫か。
- ・脊振らしさ、城原川の水源地域らしさは方針の中に反映されている。自然環境あるいは歴史資源、そういったものがよその地域と比べて、ここのほうが優れていると。だから堂々とこういう表現をして問題ないかと思っている。
⇒地域の将来像を考える際に、「脊振地域らしさ」、「他県の水源地域の活性化とは異なる視点」を入れています。
⇒将来像の方針にも、脊振らしさ、城原川の水源地域を加えています。

2-1. 地域の将来像

～脊振山から城原川下流へ水が育む 持続可能な地域づくり～

定住・交流・関係人口*の増加による生活・集落機能の維持・向上

※関係人口：移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々

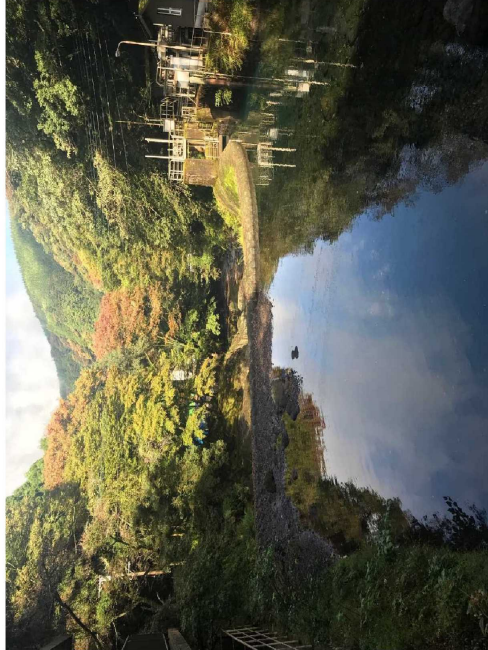
<将来像のイメージ>

- ・ **脊振山から城原川下流**：神埼市内での流域連携をイメージしています。
城原川は、その源を佐賀県神埼市（脊振町）の脊振山に発し、途中支川を合わせながら山間部を流下し、仁比山付近より扇状地形を形成して平野部の神埼市の市街地を南下し、筑後川右支川の佐賀江川の2.0 km 点に合流しています。城原川は神埼市を縦断し、脊振町、神埼町、千代田町と流れることから、上下流交流をイメージしています。
- ・ **水が育む**：水の歴史・文化・産業をイメージしています。九年庵、眼鏡橋や広滝第一発電所などの水の歴史・文化、そうめん・うどんなど水を使った特産品や、野越し、政所、下流のクリークなど水に関わるもの、水が育んできたものが多数あることから、育むという文字を用いています。
※育友会、教育の「育」でもあります。
- ・ **持続可能な**：ワークショップで A 班から意見がありましたキーワード。SDGs（「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」）の持続可能な用語です。
- ・ **地域づくり**：水源地域振興計画の目的である、地域づくりを入れています。WS での B 班「3 世代が暮らせる町」、C 班の「安らぎの町」、D 班の「賑わいのある町」をイメージしています。
- ・ **定住・交流・関係人口**：WS での意見（主に E 班）及び国土交通省でまとめている、「新たな担い手等による今後の水源地域振興のあり方に関する検討会報告書」も参考としています。
- ・ **生活機能・集落機能の確保**：少し過激的な表現かもしれないが、対象の水源地域は脊振町一体を含めたエリアであり、過疎地域に指定されています。そのため、移住政策などを図りながら、現状の生活環境や集落機能の維持・向上が求められます。
また、「新たな担い手等による今後の水源地域振興のあり方に関する検討会報告書」の参考としています。

**新たな担い手等による今後の水源地域
振興のあり方に関する検討会報告書**

流域の視点からみた水源地域振興のための

人づくり・組織づくり



令和元年 11 月 29 日

新たな担い手等による今後の
水源地域振興のあり方に関する検討会

新たな担い手等による今後の水源地域振興のあり方に関する検討会 委員名簿

【委員】

- | | |
|-------|--|
| 安藤 周治 | NPO 法人 ひろしまね 理事長 |
| 小村 幸司 | NPO 法人 小さな村総合研究所 代表理事 |
| 松木 直美 | 山梨県小菅村 村長 |
| 政所 利子 | 株式会社 五 代表取締役 |
| 宮島 咲 | ダムマニア&ダムライター |
| 宮林 茂幸 | 東京農業大学 地球環境科学部 地域創成科学科 教授 |
| 山田 健 | サントリーホールディングス株式会社 サステナビリティ推進部 チーフスベシヤリスト
(敬称略：五十音順) |

【オブザーバー】

- | |
|------------------------------|
| 東京都 世田谷区 生活文化部 区民健康村・ふるさと交流課 |
| 国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課 |
| 国土交通省 水管理・国土保全局 治水課 |

との認識を必ずしも持っていない場合があり、また、例えば多摩川の水源が小菅村や丹波山村で
あることが東京都民にあまり知られていないように、下流域においても水源地域の存在やその
意義が必ずしも認識されていない。日本が豊かで良質な水資源に恵まれているのは、水源地域の
住民が長きにわたって水源林を守ってきたことの証左であり、これを下流域地域を含む地域外に対し
て、地域産品等の特色とともにストーリー性を持った魅力ある地域としてプロモーションするこ
とが必要である。実際に、インフラツーリズム（ダムツーリズム）を活用してPRを行っている
自治体もある。このように水源地域を意識することにより、住民の中に「誇り」を生むこと、あ
るいは取り戻すことになり、地域の魅力を感じるようになる。また、地域の魅力向
上は、次世代が働く場所として水源地域や森林を見直し、のびるのある産業分野を定着させる
ことにもつながるものである。

こうした魅力の発見・再発見のためには、地域内に寛容性や多様性を育むことが大きな力とな
る。都市部さらには海外など他地域からの移住者や訪問者をよそ者として安易に排除せず、地
域に受け入れてその地域に元々存在する地域文化に共感してもらうことが重要である。また、よ
そ者を受け入れることで寛容性や多様性が育まれ、新しい文化が形成されていくこともあり、そ
れが地域の魅力となるものである。さらには、地域では当たり前と見なされていたことが、外部
の目からは新鮮で、価値あるものと感ずることもあり、そうした外部の目を借りつつも、自分
たちの地域の持つ魅力を改めて発見し、認識すること、あるいはそうした地域文化を守っていくこ
とも必要である。

○生活機能・集落機能の確保

住民が水源地域で生活していくためには、その社会インフラとなる生活機能・集落機能が確保
されていることが前提となる。医療・商業・教育施設等の維持、水源地域と都市間のアクセス性
の確保・向上、地域内交通の維持、その他地域住民のニーズに合わせた利便性の確保、向上、要
配者に対応した環境づくりなど、限られた人的・物的・財政的資源で全てを満足させることは
困難だが、一定程度の水準を維持する必要がある。

ただし、自治体アンケートの結果によれば、「担い手が多い」と答えた自治体では、その要因と
して「地域に魅力がある」「地元出身者や関係者が戻る」を挙げている一方、「担い手が少ない」
と答えた自治体では、その要因として「生活環境が悪い」「風俗な住環境がない」を挙げている
ことから、担い手を呼び込むための方策としては住環境、生活環境の整備よりは地域の魅力を高
めることやその発信が重要とも考えられる。

(2) 地域づくりの核となる人づくり、継続づくり

水源地域振興へのアプローチは様々あるが、共通するのは、地域振興を担う「担い手」の「人
づくり」と、地域振興を機能させていく「組織づくり」が不可欠であることである。

○人づくり

人づくりにには地域内のやる気のある人材を育てることが近道だが、現実には地域内には適切な
人材が少ないこともあり、地域外から新たな担い手を呼び込む必要が出てくる場合も多い。その
際には、最初から移住、定住してくれる人材を求めるのではなく、数ヶ月、1年程度住んでみる
仮住システムも有効であり、理髪に使われている制度としては地域おこし協力隊がある。また、
近年では移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と
多様に関わる人々を「関係人口」と定義し、こうした人々との交流を積極的に進めている地域も
ある。こうした新たな担い手となりうる人材を地域内に呼び込むためには、地域の魅力の発信や
生活のための環境整備が必要となる。

新たな担い手を考える上で、企業やNPOの存在も大きい。企業に関しては近年 CSR の観点から
水源林保全などの地域活動を行っている例もあるが、「サントリーの天然水の森」のように単にCSR
や社会貢献として地域振興を担うのではなく、飲料メーカーとしての事業の一環として「担い手」
にとってもメリットのある形で行われているケースもある。また、NPOに關しても地域内、地域外
を問わず非営利の立場から地域振興を担う存在は地域にとっても貴重なものとなっている。

こうした企業やNPOの社会活動において水源地域での取組が下流域地域のマッチングや、担い手とな
ることを訴えかけることにより、地域の担い手となりうる団体と水源地域のマッチングや、担い手とな
りうる団体への提案と、橋渡しを行う「結び役」の存在が重要となる。

2-2 地域の将来像の方針

【第3回・第4回委員会での指摘事項】

方針3に対する意見

■委員

- ・将来像の方針3番目の、「農特産品のブランド作りとあるが、現在、高齢化に向かっているため、現状では難しい。ブランド作りという表現は変えたが良いのでは。
- ・干し柿やシイタケがあるが、ブランドではないのでは。

■委員長

- ・ブランド化はなかなかハードルが高いという指摘であるが、農産物、特産品を開発し、そのうちブランド化されるものもあるため、開発ぐらいにとどめることもできる。実際に作って売れるものがブランドとなるので、物のブランドや地域ブランドとも解釈できる。
- ・脊振地域のブランディングも当然あるため、ブランドという言葉を残しながらも、広い意味で農産物あるいは特産品の開発を一生懸命進めることとする。
- ・商標登録していないとブランドとしての認知は難しい。脊振の清流米とか、水車米とか。ブランド化は難しい意見はいただいたが、これから地域を活性化させるためには、一つ、二つのブランドがなければ、活性化につながらないので、ブランド化は残させていただきます。

⇒方針—3の小項目に「ブランド」を残しています。

方針4に対する意見

■委員

- ・過疎地では、子どもの教育が一番心配であるが、その点盛り込まれているか。

■委員長

- ・子育て支援も含めて、地域で育てて守ることは、重要な要素である。安心して住み続ける、場合によっては移住者の魅力の要素にもなるため、子どもの教育も加えていただきたい。
- ・一方で、高齢者が元気に暮らせる地域づくり、高齢者の能力を活用するような地域づくりが目標中に出てきていない。暮らしている高齢者の方が生き生きと暮らせる町づくりというのは重要な要素である。高齢者を活用した子育て世代とか、多世代交流だとか、そんなことを事業化しようという提案である。

⇒方針—4として、「教育環境の支援」を加えています。

方針5に対する意見

■委員

- ・方針5番目の「3世代が分かりやすい情報発信」はどのような意味か。誰にでも分かりやすい情報発信ならわかるが、これは特に誰に対して情報発信なのか。

■委員長

- ・3世代は外して良い。域外、観光振興も考えるわけだから、域外に対する、地域外に対する情報発信も必要なので。対象はかなり広いということで、分かりやすい情報発信ぐらいでいいと思います。

⇒3世代は外し、わかりやすい情報発信としています。

■委員

- ・8ページの方針5の中で、城原川上下流や周辺自治体やと、「や」が連続する。

⇒適切な表現に修正する。

方針全般に対する意見

■委員

- ・将来の方針案が掲げられているが、振興策を将来にわたり誰がどういう形で実施するかを考えるべきである。方針的に加えるとかではなく、組織づくりの強化や後押しなどが将来的な一項目としてあったほう良い。

⇒組織作りについては、第7章でまとめています。

⇒方針（共通）として、「地域振興計画の推進体制の構築（交流・推進）」として加えています。

- ・地域活性化はこの先20年ではなく、30年、50年での話となる。地域の人が主体となる組織作りの強化や支援などがないと見えてこない感じがする。基本的な、将来的な組織づくりを方針の一ついれていただきたい。神埼町で活動しているが、それが常に大きな課題である。

⇒方針（共通）として、「地域振興計画の推進体制の構築（交流・推進）」として加えています。

■委員長

- ・将来像の方針の中に、全ての方針を進める上で組織づくりが重要であることを、将来像のほうにも盛り込みたい。新たな項を設けるのではなく、方針1番から5番の全ての将来像の達成のために、担い手、組織づくりで臨むのかである。
- ・一般的には共働組織となり、自発的、自律的な住民組織をしっかりとつくるのが、全ての大前提であるため、1番から5番までの将来像を達成するための人づくり・組織づくりを将来像の中に何らかの形で盛り込めるようなことを考えていただきたい。

⇒方針（共通）として、「地域振興計画の推進体制の構築（交流・推進）」として加えています。

■委員

- ・拠点づくりを入れていただきたい。神埼市全体で、例えば千代田の人、神埼の人、脊振の人っていう中で、全市で組み立てた上での脊振の拠点づくりが必要である。アクションプランの中で少し出てくるが、その辺を方針でも触れる形で検討いただきたい。
- ・全市的な施設として、観光面で生かせる拠点も必要である。住民の行政サービスではなく、特産品や観光などの事業内容の拠点が好ましいと考える。

■委員長

- ・住民たちが具体的に活動するような交流の場。住民たちが主体的に活動できるような場である。その場は、施設もあれば、集まりもある。そのようなものが地域づくりには不可欠である。
- ・五つの方針を具体化、具体的に進める上で、人づくり、組織づくり、人や組織が集まる拠点（場）の創生を共通として、何らかの形で加えたい。

⇒方針一4の小項目「交流・体験活動」の中に、脊振交流センターの活用を入れていきます。

⇒人や組織が集まる場の形成を、方針一共通に加えています。

地域の将来像に関する意見

■委員

- ・振興の団体による生活支援機能の維持、向上となっているが、下の文章は生活の集団機能の確保となっており、整合が図れていない。

⇒打ち合わせ前は、集団機能の確保としていた。打ち合わせの指摘を踏まえ、生活支援機能の維持、向上と修正したが、修正ができていない部分があったので修正する。

方針－１ 脊振山系の豊かな自然環境の保全、水資源の活用

城原川流域の森林と豊かな水資源は、水源地域の産業と生活を将来にわたり支える基盤であり地域活性化に活用していく重要な資源となります。また、城原川ダムは治水機能のダムとなることから、水源涵養林の間伐等による適切な管理、浸水区域の荒廃地化を防ぐ取組みを推進し豊かな水資源の確保や間伐材の有効利用により、持続可能な地域づくりを目指していきます。

方針－２ 歴史資源や水文化を活かしたまちづくり・ネットワークの構築

水源地域や神崎市全域には、多様な歴史文化、水に関わる観光資源（仁比山神社、眼鏡橋、広滝第一発電所）、野越などの治水文化や政所などの歴史ある土地などが多数存在しています。ダム建設を契機に、これらの歴史資源や水文化資源を結び付け、神崎市内・周辺自治体と連携した観光コースの構築、街づくりを行い、都心部からの誘客など交流人口の増加を目指します。

また、民間事業者や周辺のダム等と連携を図りながら、インフラツーリズムなど、新たな着地型観光などの観光レクリエーションも展開していきます。

方針－３ 農・特産品の魅力創出、新たな魅力の発掘・開発

水源地域には、しいたけ、柿、ほうれん草、ピーマン、米（水車米）やジビエなどの多様な農作物・特産品を有しており、複数の直売場にて販売されていますが、さらなる販売促進に向けては農・特産品の地産地消の発展的な展開や、ブランド化を図っていきます。

また、生産者の高齢化に伴い、特産品の出品が減少傾向になりつつあることを踏まえ、出荷及び集荷の構造改革、貸農園等の生産人口の確保を目指していきます。

方針－４ まちの働く場づくり、安らげる住環境の整備及び教育環境の支援

水源地域の脊振町は過疎地域に指定されるなど、人口減少が進んでいる状況です。多くの水源地域では、過疎化・高齢化が急速に進行していることを踏まえ、水源地域の活性化に向けては、人口減少における移住政策や就業支援を図りながら、定住人口を増やして集落機能の維持を図る必要があります。

また、交流活動や教育環境への支援を行い、定住人口の確保を高めるとともに、観光に来られる「交流人口」や、新たな担い手の確保として地域や地域の人々と多様に関わる「関係人口」の増加を図りながら、地域のコミュニティや愛着を高めていき、安らげる住環境を保持していきます。

方針－５ わかりやすい情報発信、世代や地域を超えた上下流交流の促進

城原川ダムの整備については、平成 30 年より「建設段階」へ移行し、建設事業に着手していますが、ダム事業が完成するまで長期間を要します。また振興計画の推進にあたり、多様な主体の参画と協働が求められることから、ダム建設の目的及び工事の進捗状況、振興計画の施策の内容など、地域住民に対してわかりやすい情報を発信し、理解を深めていきます。

また、小・中学校の学校教育及び生涯学習の一環、水源地域のみならず神埼市内全域（城原川上下流）や周辺自治体、また、都市部も含めた地域の交流を活性化します。

方針－共通 地域振興計画の推進体制の構築（交流・推進）

地域振興計画を推進するためには、市・県・国などの行政だけでなく、地域住民、活動団体・関連団体など、多様な主体の参画と協働によって推進することが求められます。将来像の達成のためには、新たな担い手の確保や組織作りを行いながら、持続的に維持・発展させていくことが必要です。

また、自然・歴史資源の保全と活用、農・特産品の開発・販売などにより、水源地域の活性化が図られ、新たな資金と人材を生み出す好循環の仕組みを作っていくことが重要となります。

そのためには、多様な主体の参画と協働による組織、補助金ではなくふるさと納税・クラウドファンディングなど自主的な資金確保など、自走できる推進体制を構築します。

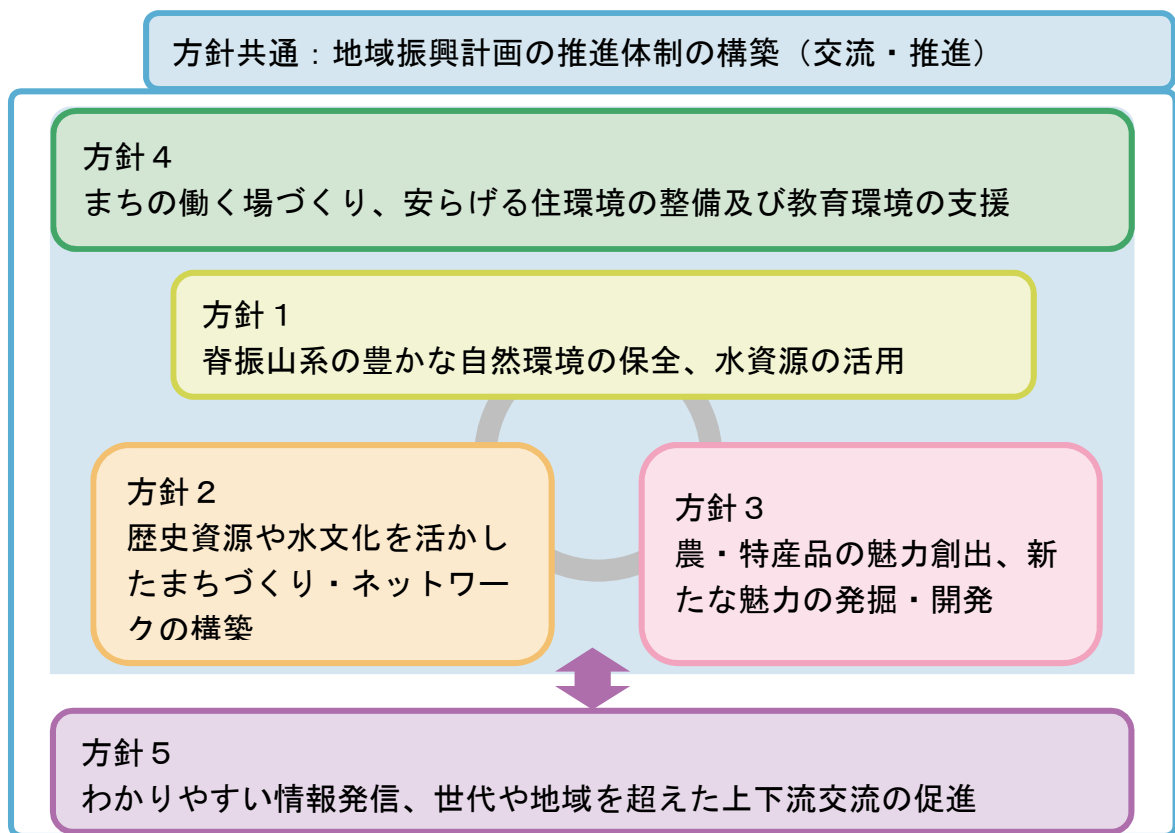


図 5-2-1 地域の将来像の方

第1回・第2回住民ワークショップ（第3回の意見を一部追記）を踏まえ、地域の将来像及び将来像の方針を検討する。

（1）地域の将来像

第2回ワークショップで各班から上げられた将来像は以下の通りである。「水」、「にぎわい（観光）」、「自然」、「安らぎ」、「3世代」がキーワードとして挙げられている。

・水を使った観光交流・循環型地域（A班）

⇒キーワードとして、観光立地（水を使った）、持続可能、循環型、発電（水力、バイオマス）などが上げられたため、

・10年後は3世代が暮らせる町だったらいいな（B班）

・水と共にある町だったらいいな（B班）

・自然を生かした安らぎの町（C班）

⇒神埼市の総合計画の中で、癒やしゾーンってなっておりますので、自然を生かした安らぎの町ということで、これが将来像としている。

・にぎわいのある町（D班）

⇒若い人たちが脊振の町に来て、子育てできるような環境をつくってほしいということで、にぎわいのある町

・地元資源の活用・発掘（E班）

・移住・定住・関係人口の増加（E班）

※第3回住民ワークショップでの追加意見

班	意見（下線付きは第3回住民ワークショップでの意見を追加）
A	水を使った観光の活性化、小さな拠点づくり、特産品・農作物、雇用を生み出す、健康、人材育成
B	豊かな自然、誇れる文化・歴史、観光、情報発信、事業継承
C	活用できるよう自然保護、自然体験ができる場所の整備、人財の確保
D	賑わいのあるまち、若い人、子供が集まるまち、利便性・交通面がよい、雇用の場が充実している、昔を思い返す地域体験、自然観光
E	物語（魅力をつなげる・脊振ならではの物語を作る）、ブランド作り、夢がある、自然 アクセス、定住（利便性（買い物や交通など生活面）、昼間の人口増加（昼間の人口増加（企業誘致など））、風通しの良いコミュニティ（官⇄民・民⇄民）今回のダムに関する情報不足の裏返し）、若い力（若い人のほうが考え方が柔軟）、地元の魅力×新しい魅力